



祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報 第59号

てんまてんじん



遷宮で結ぶ人の輪
心の輪
第六十二回神宮式年遷宮



年首御慶

辛卯元旦

表紙解説	束帶天神像	大阪府有形文化財の追加指定	表千家 献茶式	えびす祭の「招福娘」選考	所蔵古文書から①	濱川橋架橋「陳情書」	梅まつり予告
	2 頁	3 頁	4 頁	6 頁	10 頁	12 頁	12 頁

〈束帶天神像〉

表紙解説

大阪天満宮所蔵 紙本著色

天神像では正しく描かれています。
高台寺の天神像は、江戸時代中期
のもので、その頭を大きく遡る作品はみあたらないようです。

円座に坐る天神像です。画面の左
右辺が切り詰められているため、背
後に長く引く下襲の裾は、ほんの一
部が認められるだけですが、冠を被
り、黒の袍を着用し、白い表袴を穿
いて、笏を手にしていますから、公
家の正装としての束帶姿で描かれて
います。

冠に緑の刀、腰には刀の柄と玉緑の舟形口、表袴には浮織うきおりを意味するとと思われ、表袴には浮織を意味するとと思われる丸文が配され、襪すなわち靴下おねぐらを履き、表袴からは紅色の大口おほくちが覗いてみえます。腹前に平緒ひらおが描かれるのは太刀を吊るためで、背後に太刀の鎧よじりがみえます。下襲の裾は表が白で裏が蘇芳ナオハあるいは紫とみられ、冬の料として描かれています。

これらの表現は皆具かいぐといわれる一揃いの装束で、有職故実に従つており、高位の文官である菅公に相応しい姿です。円座の文様も四菱を広い間隔で互たがの目に配する公家好みの遠とおびし菱としており、天神すなわち菅公の在りし日の姿として、適切な表現と

しかし、天神の尊願はどうでしょ
うか。眼を大きく見開き、上歯で唇の外縁まで強く噛む表情が「怒り天神」を意味することは明らかですが、冠の下からみえる頭髪、眉、口髭、顎鬚のいずれも真っ白で、まるで老人のような容貌です。

菅公は配流先の大宰府で、延喜三年（九〇三）二月二十五日に五九歳の生涯を閉じましたが、画面から窓わ
れるのは、実年齢以上に老いが進んだ姿です。このような天神は「白髪天神」と呼ばれます。無実の罪で太

宰府に左遷される途次、わが身の不遇に怒りがこみ上げ、激しい怒りのために一夜にして白髪になつたと伝えられることから「一夜白髪天神」とも呼ばれ、伝承にはさまざまなものがあるようです。

新たに大阪府有形文化財に指定
「春秋遊牛図屏風」

「春秋遊牛図屏風」

去る一二月七日、大阪府教育委員会から、当宮所蔵品を新たに有形文化財に指定したい旨、二件の依頼が届きました。

の牛を様々な姿態に描いています。

もう一件は、御迎え人形のうち「雀踊り」「豆藏」の一體です。現在当宮は一六体の御迎え人形を所蔵しております、このうち一四体は既に指定されていました。しかし、なぜか右の二体が指定から洩れていたものでこのたびの追加指定となつたものです。



を掲げておきます。また「雀踊り」については、今春の梅まつりでご披露する予定です。

A wooden plaque featuring a white dog standing on red plum blossoms, with vertical text reading "壬戌辛卯歲" and a red seal.

時務（そのときの急務）を進め

る姿を表していました。ですから、「庚寅」の昨年は、前年からの流れを受け継ぎながらも、畏れ慎みながら時務を進めるべき戒めの年だったのです。

さて、今年は「辛・卯」です。

「辛」は、これまで地下深く潜在していたエネルギーが、様々な矛盾・抑圧を排除して地上に発現するこ

とを意味する文字です。

一方の「卯」は、中の二筋が門柱

両側が門扉を開いた象を表し、従来、手を付けていなかつた未開発地を思
い切つて開発することを表現してい
ます。

(安岡正篤大人の著書より)

「一夜天神」と呼ばれる散歎曲や同名の廃曲があることも知られています。特に「白髪」という謡物は、菅公が配所でわが身を嘆き、一夜にして白髪となるもので、「ことはりや」一夜には、八億四千のおもひあればしらがと成も道理也」と謡われています。菅公が一夜にして白髪になつたと伝えられる「一夜白髪天神」の伝承は、芸能を通じても広く認識されるようになつたのでしょうか。

本図の天神像とよく似た画像が京都の高台寺に所蔵されています。天神画像の多くは、粉本と呼ばれる画稿をもとに制作されるため、同じような構図や容貌の作品が量産されることになります。本図も高台寺の天神像も似通つた粉本に基づいて制作されたと考えられます。ただし、共通粉本を用いたとしても、細部に異なつた表現が生まれることはしばしばあります。本図の場合も、袍の左の鰐袖に、下襲の下に着用する紅の日めど苗^{（よめどなわら）}としていまますが、高台寺の

は俗説に過ぎないのですが、先に引用した謡物の「白髪」では、菅公は白髪の姿を水鏡に映して自らを嘆いています。水鏡は自画像伝説にしばしば登場するモチーフで、本図の白髪も、自画像としての信憑性に関係する表現なのかもしれません。

本図の画面上部には、色紙形と呼ばれる区画を色違いで設け、それぞれ松と梅を地模様として贊が施されています。贊文は「心だにまこと／の／道に／かなひなば／いのらず／とても／神や／まもらむ」と読めます。これは中世以来、北野社の御神詠として広く知られるもので、天神であることは、起請文や誓約書に用いられる牛玉宝印にしばしば天神が登場することにも関係しています。

正直を尊ぶ故に無実の罪で配流された無念から、一夜にして白髪姿になつたと解釈するのが、本図の天神とは想心ついででしょう。

天神像では正しく描かれています。高台寺の天神像は、江戸時代中期に狩野永納が編集した『本朝画史』という画史・画家伝に記載される作



一月一八日一〇時三〇分、恒例の献茶式が、表千家元不審菴の三木町宣行宗匠のご奉仕によつて斎行されました。

これまで、同じく表千家の久田宗也宗匠にご奉仕頂いておりました

が、大変残念なことに、献茶式を一ヶ月後に控えた一〇月二三日に御齋八六歳をもつてご逝去なさいましたので、本年は特別に家元よりお遣わしになりました三木町宗匠にご奉仕いただきました。

三木町宗匠は、現家元である第十四代而妙斎千宗左宗匠のご次男であり、ご結婚されてから三木町の姓を名乗っています。表千家は代々紀州徳川藩の茶頭としてその庇護を受けた家柄で、和歌山市の三木町にその屋敷を構えていたことから、その名にちなんだ名乗りとなっていました。

午前九時にご参着になつた宗匠は、天満宮会館寿の間に設けられた立札席にお入りになり、まず拝服されながら參集殿のお控えにお入りになりお召し替えの後、寺井宮司の挨拶をお点前の次第

午前九時にご参着になつた宗匠は、天満宮会館寿の間に設けられた立札席にお入りになり、まず拝服されながら參集殿のお控えにお入りになりお召し替えの後、寺井宮司の挨拶をお点前の次第

お受けになつて時刻をお待ちになりました。定刻になり御手水之儀をすまされた宗匠は、宮司以下祭員とともに参進して、御本社幣殿の座にお着きになりました。

修祓、一拝、献饌に次いで祭員か

らお点前をお願いされた宗匠は、お点前座にお進みになり、まず「御炭

法はまず湯釜を風炉から外して炭を継ぎ足すものです。

続いてお点前は進行し殿内に松風の如き釜音だけが響くなが、茶筅が清められる頃には大前に祭員によつて季節の御菓子が進め参らせられ、いよいよ宗匠は覆面をつけて「御濃茶」一服を点じて大前の仮案へお進めになり、改めて「御薄茶」一服を点じられ、無事大前へ献じられました。

その後、宗匠は御仕舞の事をお進めになり、最後に水差しのお水を足して、半束をお務めされた森宗匠とともに自座に復されました。

この後、宮司の祝詞奏上、拝礼と次第は進み、祭儀は恙なく斎行相叶つたのでした。

お父上にあたられます。そこから数えますと、もう八四回以上のお茶をご奉仕頂いていることになります。中でも一二代宗也宗匠は京都大学在学中から学生服姿で父上とともにご奉仕されていたと、寺井宮司は母上様から聞かされたといいますから大変永い間のご奉仕を頂きました。

去る平成九年には參集殿大広間の副席に設けられる「組み上げ式置き床」一式のご奉納を頂きまして、平成一四年の御祭神壱千百年式年大祭には、臨時の献茶祭をご奉仕頂き、

久田家は、表千家・裏千家・武者小路千家の縁戚であり、表千家を支える宗匠の格式を有する日本有数の茶家です。

久田家は清和源氏源滿季流御園氏末裔の久田実房を家祖とし、実房の子である房政が茶人であり剃髪して宗栄と名乗つたのを茶家久田家初代としています。

当宮へのご奉仕は、大正一五年に無適齋守一宗也宗匠から、先日ご逝去された一二代尋牛齋宗也宗匠のお父上にあたられます。そこから数えますと、もう八四回以上のお茶をご奉仕頂いていることになります。中でも一二代宗也宗匠は京都大学在学中から学生服姿で父上とともにご奉仕されていたと、寺井宮司は母上様から聞かされたといいますから大変永い間のご奉仕を頂きました。

今は只々永年のご奉仕に対し、神慮を畏んで心から感謝申し上げますとともに、尋牛齋宗匠の御靈がご平安に神鎮りますようご冥福をお祈り申し上げます。

当宮が席主となる副席のお世話すべてを「奉仕頂きました」また平成一九年の献茶式には宗匠の傘寿をお祝いする会を催して関係者一同親しくお祝いを申し上げましたが、その宴では終始ご満悦で朗らかにご歓談されておられました。そのようなお姿を昨日のことの様に思い出しまして、悲しさも相まった今申し上げます。

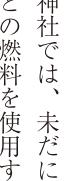
今は只々永年のご奉仕に対し、神慮を畏んで心から感謝申し上げますとともに、尋牛齋宗匠の御靈がご平安に神鎮りますようご冥福をお祈り申し上げます。

第四回 ありの人もこの人も



暖房をエアコン

に頼るようになつた現代では、一般家庭の暖房に灯油や木炭などを使う



西川輝彦さん

暖房をエアコンに頼るようになつた現代では、一般家庭の暖房に灯油や木炭などを使う



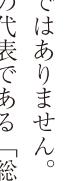
西天満

暖房をエアコンに頼るようになつた現代では、一般家庭の暖房に灯油や木炭などを使う



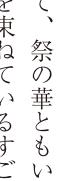
西川輝彦さん

暖房をエアコンに頼るようになつた現代では、一般家庭の暖房に灯油や木炭などを使う



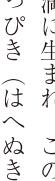
西天満

暖房をエアコンに頼るようになつた現代では、一般家庭の暖房に灯油や木炭などを使う



西川輝彦さん

暖房をエアコンに頼るようになつた現代では、一般家庭の暖房に灯油や木炭などを使う



西天満

大阪天満宮献詠 風月社 平成二十二年下半期秀歌

父亡くし四人の男兒育てたる

母の御姿日々掌を合す

妻の友より青森の林檎送り來ぬ

亡き妻今を生きてありせば

朝夕仰ぎて少女となりぬ

講堂の正面飾る誠の文字

嫁ぐ朝父は言ひたり姑に

誠をつくせ神みそなはすと

大神の遣したまへる道こそが

誠の道と思ひこそすれ

みひかり差しぬ掌あはせ祈る

大阪 金行 久夫

鹿苑寺池の眞中に金色の

一羽たたずみひとりながむる

眼をかがやかせ幼なの追ふも

ほろほろと雨降る池に青鷺の

池の面にすいすい泳ぐあめんぼを

東大阪 中山 里江

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子

神戸 鈴木 敬子

豊中 西岡 克啓

大阪 松村龍太郎

高田登美子



Ⓐ 絵はがき「濱川橋」

インターネットより

濱川橋架橋
一隙情書

が混用されたと思われます。



⑧ 絵はがき「淀川橋」

分かり、当宮の架橋陳情も
肯けました。

陳情書を提出してから後
の経過は、明治三十五年の
「本殿詰所日誌」と「日誌簿」
によつて、二月二日に川崎
新橋架橋起工式が行われ祝
詞を奏上したこと、そして
十一月一日に殿川橋新架通



桜宮橋の工事 後ろに見える橋は濱川橋

ボートを漕いでいるのは、大阪高商（現大阪市大）の学生さんでしようか。この絵葉書のタイトルは「淀川橋」となっています。明治三十六年発行の地図（右ページ下）にも淀川橋と記載されています。淀川橋が正式なものでしょうが、次第に淀川橋と淀川橋が混用されたと思われます。

江戸時代から明治のはじめまで、大川（淀川本流）で天満橋より上流には橋がかかっておりませんでした。対岸とむすんでいたのは「川崎渡」と「源八渡」と最上流の「毛馬渡」でした。天満川崎の地から向かいの備前明治十年、「川崎橋」が橋本甚兵衛によつて官許を得て架けられました。天満川崎の地から向かいの備前第一回として、濱川橋架橋「陳情書」をとりあげました。

昨年三月二二十五日、当宮では初め
ての史料集『大阪天満宮^{秋大祭}』
流鏑馬式史料(近代一)慶応元年(明治
二十年)を発行いたしました。

史料集は、今後、近代二(明治二十二
年～四十五年)・近代三(大正二年～昭和
二十年)を発行して参る予定です。史料
料集編纂のため、当宮所蔵古文書を
読み進むうち、しばしば面白い史料
が出会います。それらを順次社報誌

大阪天満宮所蔵古文書方引①
澗川橋架橋「陳情書」

島(現都島区網島町の一部)へ架けられた私設の橋で、通行料一人三厘を徴収し「ぜにとり橋」と呼ばれたとか。この橋は明治十八年の淀川大洪水で、下流の天満・天神橋以下の橋々といっしょに流されてしましました。その後、川崎橋は再建されたことはなく、渡しが復活しました。

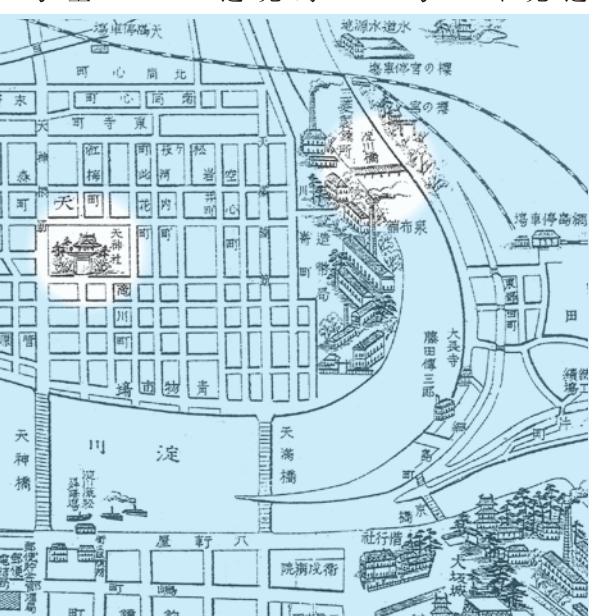
ですから、明治三十五年に川崎と桜宮の間に架けられた濱川橋は、天満橋上流で、大阪市が大川に架橋した最初の橋となりました。その後、昭和五年に少し下流に桜宮橋が架橋されて、濱川橋は撤去されました。ほぼ三十年間の命でしたが、濱川橋の果たした役割はたいへん大きかったと思われます。桜宮橋が架けられた昭和五年までに、都島橋(大正十一年)と毛馬橋(大正三年)が架けられました。

濱川橋の絵葉書(写真A)を見ると親柱に「濱川橋」の文字が刻まれていて立派な擬宝珠^(ぎぼし)がついています。

二四一 写控
陳情書

明治三十四年	天満宮
十二月九日	社司 寺井種清
	社掌 大町安敬
	全 滋岡從長
	全 大道久之
氏子総代	飯田德右エ門
全 大島良輔	上田武藏
大阪市長鶴原定吉殿	
古文書目録 A-35より	

布館をはじめ造幣局の建物が見えます。同じく絵葉書(写真B)も桜宮側から写していますが、下流側から撮っているので、対岸上流方向に見える煙突は、造幣局の北にあつた三菱製錬所のものでしょ。欄干の上に擬宝珠とガス灯が写つてます。



第五回内国勧業博覧会観覧必携 大阪全図(明治36年刊) 当宮藏

